みどりの風

令和６年１月 31 日発行
校　報　　６１６号
（みどりの風　１５８号）
練馬区立関町北小学校

「声なき声」を聴く

主幹教諭　三浦勝也

１日に起きた能登半島の地震から、もうすぐ１か月が経とうとしています。改めて、被災された方々、その関係者の皆様にお悔やみとお見舞いを申し上げます。

津波による被害や家屋の倒壊・交通網の損害など、私たちは報道を通して、いかに大きい災害だったのかを知りました。現地では依然としてインフラが回復せず、寒さに耐えながらの厳しい避難生活を続けている方、家族と離れざるをえない状況の方が大勢いらっしゃることも耳にしました。

私たちの暮らしはどうでしょう。安全な場所で生活や勉強ができる。家族や友達・仲間・同僚と過ごせる。会話を楽しみ、一緒に遊べる。温かい食事が３食摂れる。清潔な水で入浴やトイレを済ませることができる。ありがたいことばかりです。ですが、このような生活は実は当たり前ではなく、いつ何時できなくなってもおかしくないのです。何不自由なく生活できることに感謝するとともに、毎日をより大切にしなければという気持ちになります。

一方、世界の国々の中には、私たちが当たり前だと思っている生活ができない場所がたくさんあります。先日、本校では「ユニセフ集会」を実施し、世界の現状やユニセフが行っている支援について学びました。

「今、世界では５歳までに亡くなる子供が年間で５００万人います」
「約２０秒に一人の命が奪われているということです」
「また、学校に通いたくても通えない子が、約２億４４００万人います」

映像に合わせて、代表委員会の子供たちのナレーションが体育館中に響きます。全校児童が集まったにもかかわらず、水を打ったような静けさです。子供たちのスクリーンを見る眼差しは、真剣そのものでした。誰もが、自分がいかによい条件が整った環境にいるのかを感じたことでしょう。

日本は豊かな国です。しかし、物が豊かであることと心が豊かであることは比例しないのかもしれません。数年前、自分の鉛筆をわざと折って遊んでいる子を指導したことを思い出しました。鉛筆は木材から作られています。植物にも生命があるので、鉛筆はどこかの木の命を宿しているともいえます。それを折ることは、木の命を奪う行為ともいえるでしょう。その鉛筆は「私の命を大切にして」と言っていたかもしれません。

手元に届くまでには、製造した方、運送する方、販売した方の、それぞれの想いが込められてきています。「手にとった人が気にいるかな」「長く使ってほしい」「その子の勉強に役立つといいな」など。声としては聞こえませんが、「声なき声」を想像することができれば、故意に折るという悪ふざけはしないはずです。

声なき声を聴くとは、相手を深く理解しようとする、相手の状況や立場を考えようとする、相手を敬う、つまり慮ることです。これは、相手が生き物であれ物であっても変わりません。２月は今年度最後となるふれあい月間です。子供たちの「声なき声」を聴く力を高め、学校の中がお互いを思いやる行動であふれる１か月にできるように、全学級で指導してまいります。